

三大アヴェ・マリアを聴く!

●チャペル・コンサートのリハーサル・・・!

今日は、10月18日(土)に春日部地区浦高会で企画している富田千種さん(19回)による「チャペル・コンサート ～歌声の集い～」のリハーサルを聴かせていただきました。午後2時から約1時間半、チャペルに響くパイプオルガンの音と富田さんの歌声を関係者3人だけで贅沢に楽しみました。



富田さんが用意された曲は10数曲あるようですが、パイプオルガンとピアノの伴奏ではだいぶ勝手が異なるようで、重厚なメロディの曲はパイプオルガンの調べに乗って素晴らしいのですが、カンツォーネのような曲はピアノでないと難しいようです。

そんな中で、富田さんから「妻からプロテスタント教会で歌うのはどんなものか・・・という話もあるのですが、今回は世界三大アヴェ・マリアを歌ってみたい」とのご提案がありました。お話によるとマリア信仰はカソリックでは強いようですが、プロテスタントではないそうです。そこは、音楽ということでお許しをいただこうと思っています。さて、皆様は「世界三大アヴェ・マリア」ってご存じですか?

* *

◆シューベルトのアヴェ・マリア

♪アヴェ・マリア 慈悲深き乙女よ おお聞き給え 乙女の祈り・・・♪

『シューベルトのアヴェ・マリア』として知られるシューベルト歌曲『エレンの歌第3番 Ellens dritter Gesang, Ellens Gesang III』作品52-6(D.839)。

グノー(バッハ)やカッチーニのアヴェ・マリアと並び、世界三大アヴェ・マリアとされる『シューベルトのアヴェ・マリア』の歌詞は、スコットランドの詩人ウォルター・スコット(Sir Walter Scott/1771-1832)による叙事詩『湖上の美人 Lady of the Lake』から採られている。



この『湖上の美人』の物語の中で、王から追われる身となった「湖上の貴婦人」ことエレン・ダグラスは、聖母マリアに助けを求めて祈りの言葉を口ずさむ。そのエレンの歌こそが、シューベルト歌曲『エレンの歌第3番』であり、それが『シューベルトのアヴェ・マリア』として定着することとなった。

* *

◆グノーのアヴェ・マリア

『アヴェ・マリア(グノー/バッハ)』は、J.S.バッハの『平均律クラヴィーア曲集』第1巻の第1曲「前奏曲」を伴奏に、フランスの作曲家グノーが主旋律を付けて1859年に発表した讃美歌。

『グノーのアヴェ・マリア』をはじめとして、各作曲家による『アヴェ・マリア』の歌詞として用いられているラテン語の祈禱文の冒頭には、新約聖書において天使ガブリエルがマリアにイエスの受胎を告げる「受胎告知(じゅたいこくち)」のセリフが登場する。

「マリアよ、おめでとう。あなたは恵まれた方。主があなたと共におられます」(ルカ福音書 1:28)。

* *

◆カッチーニのアヴェ・マリア

『アヴェ・マリア(カッチーニ)』は、イタリアの作曲家ジュリオ・カッチーニの代表曲。20世紀末にレスリー・ギャレットやスラヴァのCDで一気に知名度が高まった。ジュリオ・カッチーニ(Giulio Caccini/1545-1618)は、ルネサンス音楽末期からバロック音楽初期におけるイタリアの作曲家。その前半生についてはほとんど知られていない。30代半ば頃からメディチ家の宮廷で従事し、テノール歌手として働きながら作曲活動を続けていたという。

『アヴェ・マリア(カッチーニ)』については、カッチーニの作とみなすことに疑問の声も上がっている。まず、出典そのものが当初から明らかではなく、録音も楽譜も90年代前半まで全く知られて来なかった。さらに、80年代以前の愛唱歌を集めたなどの楽譜にも収録されて来なかった上、現在入手出来る出版譜は全て編曲を経た物で、カッチーニの曲集には載っていない。また、歌詞がただ“Ave Maria”を繰り返すだけという内容も、バロックの様式とは相容れないとされる。これらの疑問から、本当の作曲者は現代の匿名の人物ではないかとの憶測が生まれたようだ。真相は今だ謎に包まれている。【「有名なクラシック音楽 解説と視聴」より】

* *

さて、18日にはこれらの違いを体感して・・・!

